中田図書新聞

【主な記事】
・筒美京平のダンディズムの秘密は含羞にあった
・いま再評価される異端文学作家
・「鮫」視眩々
・大人にこそ読んでもらいたい

ＢＯＯＫＳなかだ　掛尾本店・コミックラボ　富山市掛尾町180―1　℡076―492―1192

筒美京平のダンディズムの秘密は含羞にあった

筒美京平が亡くなってはや一年。その間トリビュート盤はあったものの（これはこれで素晴らしいものですが）、個人的にしっくりくる追悼がないなと感じていた。

そんなモヤモヤした気持ちを払拭してくれたのが『筒美京平　大ヒットメーカーの秘密』だ。タイトルだけ見ると、大の京平マニアである近田春夫による緻密な楽曲分析と思わせるが、さにあらず。第一部こそ楽曲と当時の音楽状況を踏まえて筒美京平のヒストリーを語っていくが、聞き役の下井草秀（この人も相当詳しいね）との息もピッタリで、この部分だけでも凡百の京平本を凌ぐクオリティ。

白眉は第二部の実弟・渡辺忠孝、盟友・橋本淳、秘蔵っ子・平山三紀（現みき）各人と近田さんとの対話篇だ。京平さんはあれだけの偉業（シングル総売上七五六〇万枚！）と名声を持ちながら、表舞台には出なかったため、その素顔を知る人は少ない。このお三方の語る京平像は本当に新鮮だ。初出の話も多いと思われるので、実際に本書にあたって頂き驚いてもらいたいのだが、少しだけ書くと、小学校時代に初めて作った曲を近所の子供たちに順番に歌わせて、「あんた下手だね」なんてコメントしたとか（京平さんは最初から京平さんなんだなあ）、「ビューティフル・ヨコハマ」に出てくるハルオにゼンタがそれぞれ淳さんと京平さんの息子の名前だとか（近田さんもハルオなので、何であまり一般的でない名前が歌詞に入っているのか気になっていたそうです）、ブンブン唸るベースラインがご機嫌な屈指の名曲「真夏の出来事」はリズムが新しすぎて三紀さんが最初は歌詞はおろかラララでも歌えなかったとか。

京平さんは同業者と馴れ合わず、勲功や政治も寄せ付けず、大成しても趣味的な仕事や楽隠居もせず、最後まで現役のいち作編曲家であった。そのダンディズムには権威として奉られたくないという含羞があったに違いない。㊊

「100文字で済むことを二千文字で伝える作家」岸田奈美

べらぼうに面白い文章を書く人がいる、ということで大きな反響を呼んだエッセイ『家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった』の著者、岸田奈美さん。

その新刊『もうあかんわ日記』がこれまた面白い！と叫びたいところなのですが、単純に「面白い」「笑える」と言ってしまうのが憚られるほど、彼女の身には次々と「もうあかんわ」な出来事が降りかかります。二十九歳の女性が一人で担うには重すぎるタスクの数々と、タイムスリップしてしまうおばあちゃん。自分の身に置き換えると、泣くことしか出来そうもありません。

しかし、岸田さんは持ち前のユーモアとチャーミング、そして文章の力で、この「もうあかんわ」を乗り越えようとします。「人生はひとりで抱え込めば悲劇だが、人に語って笑わせれば喜劇だ」と。

本書はウェブサイトｎｏｔｅで連載されていたブログの書籍化ですが、紙の本ならではのちょっとした仕掛けもあります。ウェブで読んだ方もそうでない方も、ぜひお手に取って、遠慮することなく大いに笑っていただきたいです。㊐

我、愛子を愛す

佐藤愛子さんの最新刊の書名に、ニヤリと笑ってしまった。その名も『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』。直木賞受賞作「戦いすんで日が暮れて」とリンクしており、それだけで嬉しく思う。

受賞当時の講評に「ドライなユーモア、塩からいペーソス」があり、それは「技巧でなく体質から出ている」〈松本清張〉とあったが、その魅力は絶えることなく現在まで続いている。私が佐藤愛子さんを初めて読んだのは道徳の教科書に採用されたエッセイだった。自分にとってはドライで塩からいというより、爽やかで清々しい笑える一文であった。

手あたり次第に読むうちに、弱くて愚かしく全然立派ではない大人の姿と世の中を知ることになったが、軽蔑や失望は感じず、むしろ安心したのを覚えている。ありのままを語る言葉や作者の目線と感覚に悪意やこきおろしはなく、面白がる感覚は今も心地よい。

あれから四十年ちかく、体質だからそうとしか書けないとしても、それをずっと愛する読者がいる。少なくとも、ここに一人。㊍

【書誌情報】『筒美京平大ヒットメーカーの秘密』（近田春夫／文春新書）¥850、『もうあかんわ日記』（岸田奈美／ライツ社）¥1,500、『九十八歳。戦いやまず日は暮れず』（佐藤愛子／小学館）¥1,200

※価格は本体価格です。

涙腺崩壊？猫にまつわる短篇集

『みとりねこ』は、『旅猫リポート』以来となる、有川ひろさんによる猫と人との短編集です。一，二話が『旅猫リポート』の、そして三話が『アンマーとぼくら』の外伝で、有川ファン必読の一冊といえるでしょう。もちろん、この作品が初めての出会いでもまったく問題はありません。

登場する猫達は拾われて家猫になり、猫自身が虹の橋を渡る、あるいは人間・飼い主との別れまでを描く短編が中心です。そのためほっこり、クスッとなる話もありますが、別れに感情移入して不覚にも涙となりがちでした。猫が語り手となる作品も、猫はそんなことを思っていたのか、思っているかもと違和感なく受け入れられました。

全七話の中で一番心に残ったのは表題作の「みとりねこ」。猫の浩太二〇歳、醤油にひたした肉球で、テーブルクロスに足跡をペタペタとつけるがそれはいたずらではありません。その理由が徐々にわかってくると猫の浩太のことがとてもいとおしくなります。

全編通して人間は猫のことを思い、猫は人間のことを思う、お互いの深い愛情が伝わってきてあたたかい気持ちにさせられる作品です。

㊐

「あ」が消えて…

最初に消えたのは「あ」。「あ」が消えると「あなた」も「あい」も「A新聞」もなくなった。

作家・佐治の考えた実験小説は、日本語の音を一つずつ消すごとに、その音を含む名前のものが現実世界から消えていくというもの。最初は言葉の言い換えを楽しんでいたものの、モノがなくなり、ヒトがいなくなり……最後は……。使える音が少なくなるにつれてどんどん世界が狂っていき、物語が加速していく。

『残像に口紅を』は一九八九年刊行の筒井康隆の作品だが、今年、TikTokで紹介されバズったのを契機に再び注目されている。三十年前の作品なので、言葉づかいに多少時代を感じるが、古臭い感じは全くしない。日々当たり前にあったはずのものが気づかないうちにどんどん消えて行ってしまうという展開が、現代の不安感とマッチしてしまったのか。刊行当時は設定優先の実験小説と評価されただろうが、私には読みすすめるにつれて世界の儚さと無常さをひしひしと感じられた一作。

㊍

いま再評価される　異端文学作家

美しく妖気漂う表紙絵と、帯に抜粋された、篠田節子の熱の入った解説を読んで手にとった。読後、何だかすごいものを読んでしまった、という衝撃が冷めやらない。まさに「鬼才」。宇能鴻一郎は、戦後の幻想・異端文学を代表する作家であると確信して本を閉じた。

『姫君を喰う話　宇野鴻一郎傑作短編集』は、六十年代後半から七十年代にかけて、新進の純文学作家が官能小説の名手として知られるようになる、ちょうど端境にあたる時期に書かれた六つの短編を収録している。芥川賞の「鯨神」はもちろんのこと、特に印象的だったのは、「西洋祈りの女」と「リソペディオンの呪い」。土俗的な描写のリアリティと、変幻自在に時空を飛び越えて巧みに展開するストーリーが融合して、読者は不思議な魅力にからめとられる。そして突然迎える結末。その着地の見事なことといったら、ため息が出るほど素晴らしい。

かなり読み手側の覚悟も試される際どい作品集ではあるが、安易な「多様性」の礼賛など笑い飛ばす、挑発的な文豪を是非再発見していただきたい。

㊎

新しい文学の創造を目指した傑作

クレメンス・J・ゼッツは、一九八二年オーストリア生まれの作家です。『インディゴ』は、ゼッツが二〇一二年に発表した三作目の長編小説で、日本での初翻訳作品です。

主人公は著者と同名のクレメンス・ゼッツという数学教師で、オーストリアにあるヘリアナウという全寮制の学校に赴任するところから物語は始まります。ヘリアナウは、インディゴ症候群という謎の病気を患う子供たちの学園です。ゼッツの元生徒で画家のロベルト・テッツェルと、ゼッツ、そして十五年という歳月を経て明らかになるとある事件が交差しながらストーリーは展開していきます。

この小説、一読では著者の意図を全て理解することは難しいかもしれません。小説の要所で挟まれる挿話、そして注釈など様々な箇所にゼッツが仕掛けたトリックが仕組まれており、インターネットなどで読者自身が調べることで補完されるという仕掛けがあります。ポスト・トゥルースの時代におけるフィクションとは何なのか？というゼッツの問いかけなのかもしれません。終盤にかけての怒涛の展開に圧倒されると共に、この小説は一体何だろう？という疑問符が湧いてくる不思議な読後感がある作品です。

㊍

【書誌情報】『みとりねこ』（有川ひろ／講談社）¥1,550、『姫君を喰う話　宇能鴻一郎傑作短篇集』（宇能鴻一郎／新潮文庫）¥670、『残像に口紅を』（筒井康隆／中公文庫）¥743、『インディゴ』（クレメンス・J・ゼッツ　著、犬飼彩乃　訳／国書刊行会）¥3,200

※価格は本体価格です。

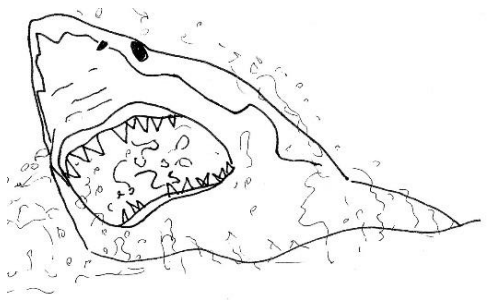
「鮫」視眈々

自分の思っていることと違う現実というものはよくある。例えば、ピラニアという生き物。非常に臆病な魚なので、人間が近寄ると逃げてしまう。血を流していない限り、ピラニアが噛みついてくることはない。サメも同じだ。サメが人を襲うことはめったにない。海面に浮いている人をカメと勘違いすることがあるだけだ。考えてみれば、サメに喰い殺されるというニュース、今までの人生で聞いたことはない。

「サメ映画」のはしりと云えば、スピルバーグの《ジョーズ》は誰もが知っているだろう。実は、ジョーズが「3」まで作られていたということは知らない人が多いのではないか。七〇年代、ヒット作をシリーズ化するという手法は定着しておらず、《ジョーズ》はシリーズ化のはしりでもあった。

邦画においてサメ映画というものはあまり見かけないが、洋画では花盛り。そんな一九六二～二〇二〇年までのサメ映画を紹介するのが『サメ映画大全』である。著者は本書の執筆にあたり、一年五か月かけてサメ映画を見まくっている。同じ映画好きとはいえ、同ジャンルの映画を見続けることは真似できない、脱帽である。紹介されている作品は一〇〇作以上あるけれど、ほとんどB級、ちょっとA級。【サメ映画からの物体X】、「ゴースト　サメ映画の幻」、「レイダース　失われたシャーク」、「エレクトリカルシャークパレード」のような元ネタを想像できるものをはじめ、水陸両用サメ・雪山サメ・ナノスケールサメとなんでもご用意しております。

《ジョーズ》を超えることができなくたって、ヤツらは満足しているに違いない。今日は読者という獲物を狙っている。㊙



「自分」とは何か？

『「自分」とは何か？』という誰もが悩む疑問が、脳科学や進化心理学、行動遺伝学などの先端分野の発達により解明されつつあります。『スピリチュアルズ「わたし」の謎』によると、人間はたったの八つの要素でできており、お互いにそれらしか興味がないそうです。文字にすると身も蓋もない内容ですが、エビデンスがしっかりしている為に説得力があります。「外見」、「知能」などタブーに近い領域については今後の踏み込んだ研究により解明されていくのでしょう。

「自分」というのは変えようが無いので（意志の力で無理に変える努力をすると寿命が縮む）、それに適した人生を自分で設計していくしか無いようです。ただし、とても困難なことなのですが。

面白いのは、全てのパーソナリティは進化の結果であって、本質的に優劣は無いということです。慎重な人ばかりや勇敢な人ばかりだったら、人類が変化に適応できず既に滅んでいたと推測されます。

社会で成功しやすいパーソナリティというのはあるにしても、一人一人の性格や容姿、能力には、何かしら前向きな意味があるはずです。そう考えると、歴史上かつてない自由な社会の時代なのですから、自分なりに生きていこうと細やかな励みになります。㊙

「福の神」か「祟り神」か

戦艦大和といえば、当時世界最大にして最強の、日本を代表する戦艦である。博物館が建てられたり、フイクションでは宇宙に行ったり轟沈から七十六年が経過した今もその人気は衰えを知らない。水平線の向こうまで届くという四十六センチ砲、魚雷の直撃をものともしない装甲など、かの戦艦がいかに最強であったかを語る書籍は多い。一方で、大和建造には国家予算の四%が充てられたという。勝つために、最強の戦艦を運用するために、帝国海軍が費やした大量の資金。『戦艦大和の収支決算報告』を読めば、彼らの懐を省みぬ熱狂ぶりがわかる。すなわち、何にいくら使ったのか。

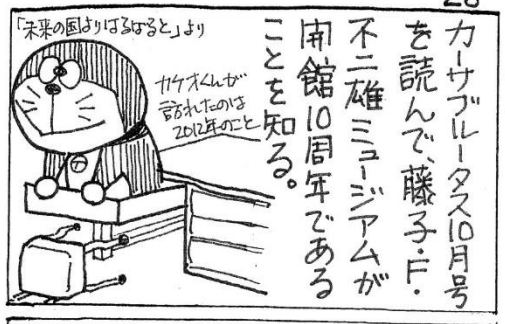
まず、なんといっても規模が桁違いだ。大和のために港を作り替え、大和のために別に船を作り、大和のために地形をも変えたという。しかもこれを極秘に行ったというから驚きだ。隠すためにもお金がかかる。航行せずともかかる諸経費もまた、戦時中とは思えない特例ぶりだ。ページをめくるたびに桁外れに増していく経費の額に、これが船一隻の話であることを忘れてしまう。経営に携わる者でなくとも頭が痛くなるだろう。しかも最期には、大量の弾薬、燃料、その他資材とともに海中に没している。戦後日本の復興、発展に貢献したであろう約三千人の人財も道連れである。

大金と人命を消し去った戦艦大和は、まさに「祟り神」。勇壮な姿とは対照的な影の一面である。しかしながら、戦艦大和は戦後、別の形で日本に富をもたらした。それは最新技術の転用や造船業の発展など、最強の戦艦を追い求めたが故の産物であったと言える。消えていった命を思えば、「福の神」だと単純に喜ぶことはできない。しかし、困難や無謀、一見無駄に見えるものも、見方や使い方が変われば更なる発展に寄与するという事実は、困難な今を生きる我々にも学ぶべきところがある。戦艦大和を「祟り神」とするか「福の神」とするか。読者それぞれに答えとなる姿が思い浮かぶだろう。その千差万別のシルエットこそ、かの戦艦の魅力なのかもしれない。㊐

【書誌情報】『サメ映画大全』（知的風ハット／左右社）¥2,000、『スピリチュアルズ「わたし」の謎』（橘玲／幻冬舎）¥1,700、『戦艦大和の収支決算報告』（青山誠／彩図社）¥909

※価格は本体価格です。

カケオくん　28



※価格は本体価格です。

【書誌情報】『Casa BRUTUS 二〇二一年十月号』（マガジンハウス）九八二円

大人にこそ読んでもらいたい

絵本作家、junaidaをご存じだろうか。美しく、かつ繊細で緻密な絵と想像力を掻き立てられる話で近年MOE絵本屋さん大賞常連になりつつある注目の絵本作家だ。

junaidaの新作『街どろぼう』はひとりの巨人が主人公の小さな物語である。山の上でひとりきりで住んでいる巨人はさびしくなり、山のふもとの一軒の家を山のてっぺんに持ち帰ってしまう。

山のてっぺんに街が出来、巨人を中心に人が暮らしている絵には衝撃を受ける。どんなに周りに人がいても、自分を気にかけてくれる、大切に思っている人がいないといつまでも孤独なのだ。大勢の人でなくても良い。他に誰もいない場所であったとしても、たったひとりでも自分を心から思ってくれる人がいれば、本当の居場所が見つかる。

大人はより「街の中の巨人」が多いに違いない。だからこそ、この絵本のラストに希望を見出して、もう少しさびしさとも戦ってみようかと思うのだ。　㊍

幸と不幸の感覚がよくわからなくなるお話

この作者は元々「げんふうけい」という名義で、個人のブログや某掲示板に小説を投稿されていた方で、自分も当時の投稿小説のまとめサイトなどで読んだことがありました。独特の世界観があり、何かしらネガティブな要素のある男女が話の中心になることが多いです。初期の投稿作品が元になっている、そこそこ幸せな人生を歩んでいた男が過去にタイムスリップしてしまったが、元々幸せだった故に同じ人生を再現しようとしてしまう『スターティング・オーヴァー』（KADOKAWA）、寿命を売ることができる世界で、自分の寿命の安さに絶望して、三ヶ月のみ残して全て売ってしまった主人公の残りの人生にまつわる話『三日間の幸福』（KADOKAWA）などは、人生観や幸せの価値観について考えさせられる作品です。今回紹介する『恋する寄生虫』も、潔癖症に悩む青年と、ある理由で不登校になっている女子高生にまつわる話ですが、これもまた考えさせられる結末となっています。この作品は今年の十一月に実写映画化が予定されており、そちらでも話の内容は楽しめると思いますが、ぜひ文章で雰囲気を体験して欲しい作家です。またこういった予想外の作品との出会いを求めて、書店でいつもとは違う本棚に手を伸ばしてみるのはいかがでしょうか。　㊎

メンタル強め最強美女でデトックス！

ここ数年、耳にする「自己肯定感」という言葉。現代のストレスフルな社会の圧を感じます。そんな中で毎日頑張ると、周囲からの色々なネガティブな感情にふりまわされることもあるでしょう。

『メンタル強め美女白川さん』の主人公は「あざとくてもかわいくいたい」がモットーな普通のOL。周囲からみると「ぶりっこ」にも映る、そんな白川さんの姿には周囲から妬み嫉みの視線が……。しかし白川さんはそんなストレスも、ちょっとした一言で視点をかえて華麗にかわすだけでなく、凝り固まった周囲の考え方まで変えてしまうメンタル最強美女なんです。個性的なキャラクターも多数登場、ネガティブな自分からちょっとずつ強くなろうとする先輩・後輩の魅力も満載です。

日々、少しずつ溜まってしまったそのストレスも、自分に「いいね」ができる、心のデトックスに。　㊐

【書誌情報】『街どろぼう』（junaida／福音館書店）¥1,500、『恋する寄生虫』（三秋縋／メディアワークス文庫）¥650、『メンタル強め美女白川さん①、②』（獅子／MF comic essay）各 ¥1,050

※価格は本体価格です。